

【話のねらい】

(1年生から4年生)

どうして日本の森保監督は世界一を取りたいと言ったのかを知る。

(5年生から7年生)

日本の森保監督は、日本のチームのどんな所がよさだと思っているのかを知る。

(8年生から9年生)

校長先生がおかしな質問だと思っている理由の真意を考える。

現在、2026年FIFAワールドカップ北中米大会が行われています。日本はグループ予選を勝ち抜いて、決勝トーナメントに進みましたが、1回戦でブラジルに残念ながら敗れてしまいました。現在、スペインとアルゼンチンという国が優勝をめざして決勝戦で戦おうとしています。

さて、残念ながら負けてしまった日本ですが、監督である森保 一さんは「世界一を取りたい」とつねづね語っていました。もちろん、日本の選手たちは、現在海外のクラブチームで活躍している選手が多く、一人ひとりの実力もこれまで以上に高まってきていることもあったのでしょう。それでも、過去ワールドカップでは、ベスト16までしかいったことのない国です。いきなり「世界一を取りたい」というのは、言い過ぎではないかという人もいました。

森保監督がその理由を聞かれるとこう答えたそうです。「日本のためにです。日本人の誇りを取り戻したいから。」と。

「日本のため」「日本人の誇りのため」はどういうことでしょうか。

サッカーというスポーツは、世界的にはフットボールと呼ばれます。競技人口（サッカーをやっている人の数）は公式の集計で2億6000万人と発表されています。ボールひとつあればどこでも楽しめるもので、遊んでいる人も含めればその何倍もの人がサッカーを経験していると言えます。もちろん観るスポーツとしては圧倒的に世界一のスポーツです。

つまりこの世界で頂点に立つということは、日本の存在を一気に高めることにつながります。「日本はすごいね」「ボールを回す連係が上手だね」「礼儀正しくて相手チームへの尊敬も忘れない」「観客にも、運営スタッフにも、戦いの場になったフィールドにも礼を尽くす」「ロッカールームも使う前よりもきれいにして帰っていく」「チームの団結力がある」など。世界の人がそんなふうに日本を見ることになったらすばらしいし、とても価値のあることではないだろうか。日本国内はもちろん、世界でがんばっている多くの日本人が誇らしく胸をはることができるのではないだろうか。だから世界一になりたいんです。と森保監督は語っています。もしかすると、Wカップをめざして戦っていた世界中の国々も同じ気持ちで戦っていたのかもしれないね。

加えて、森保監督は日本人に「もっと自分にはよいところがある」と思える「自己肯定感」を持ってほしいとも語っています。失敗した自分がいても、それも含めて自分なのだから、そういうものとしてすべてをまるごと肯定して受け入れ、そこからスタートすればよい。またそうした自己肯定感がなかったら周りの人も認めることができません。自分というものをしっかり持てないままで自分と周りの人が向き合っても、批判もなければ学びもない。お互いに成長がないでしょう。

最近、学校のアンケートで、校長先生がおかしな質問だなあとと思っているものがあります。それは「自分には良いところがあると思いますか？」という質問です。誰に聞いているんだ！とよの西学園の児童生徒に本気で聞いているのか？おかしなことを聞くなあー。良いところがあるに決まっているじゃないか！と思っています。その質問がもし、こんな質問だったらわかります。「あなたは自分の良いところをたくさん見つけていますか？」と。とよの西学園の児童生徒のみなさんには、良いところがたくさんあります。でもその良いところを自分でたくさん見つけられているでしょうか？人と比べる必要なんか一つありません。自分で自分はこんなところが良いところだよなあと思っていればそれでいいのです。あなたの良いところはあなたのものです。何も周りの仲間に伝えなくても構いません。自分で自分の良いところがわかっているだけで十分です。

「みなさん一人ひとりが自分が自分であることに誇りをもって生きていってほしい」と校長先生はずっと思い続けています。「自分の良いところ」も「まだまだだなあと思うところ」もまるごと受け止めて、自分を大切に生きていってほしいと思っています。

この夏休み、「自分のよいところ」をたくさん見つけられる夏休みになることを期待しています。楽しい夏休み、充実した夏休みを過ごしてください。

これで校長先生の話が終わります。